

河野通博が語る戦中期から戦後における 日本の中国地域研究と国際交流の足跡

野間 晴雄

一 はじめに——解題に代えて——

河野通博（一九一九―二〇一〇）はその晩年の十二年間（一九七八―一九九〇）を関西大学文学部で人文地理学の教授をつとめた。その当時の私は、氏とは関心分野や地域（中国・漁業経済）とは縁がうすく、学会等で顔は存じ上げていたが、直接講義をうけたことも、親しく話をしたわけではなかった。その私が関西大学に着任した翌年の二〇〇三年、人文地理学会のアジア地域研究部会のメンバーが中心となって、日本学術振興会の科学研究費をうけて、ひとつの研究グループが結成された¹。存命のシニア地理学者に、アジア太平洋戦中期から戦後、二〇世紀の後半の約七十年にわたるアジア地域研究やその調査内容・方法について話題提供してもらい、それに研究グループのメンバーや特別ゲストが質疑応答するかたちで、日本のアジア地域研究の流れを大きくとらえようとするプロジェクトである。そのなかで、地理学界で中

国地域研究の先達としてとりあげたひとりだが、上の河野通博であった。

河野水軍の系譜を継ぐ河野の本籍は愛媛県東予市である。しかし父親が旧制中学の理科教師をしていたことから、岐阜県大垣市で生まれている。父親は勤務校を転々としたが、最後には母校の



写真1 話題提供する河野通博氏
(2003年11月)

広島高等師範学校附属中学校で教鞭をとることになったため、河野は大学入学までの青年時代を広島市ですごしている。父親の教える附属中学校を四年で卒業後、旧制の広島高等学校甲類入学（文系）を経て、一九三九（昭和一四）年四月に京都帝国大学史学科に入学、地理学を専攻した。しかしアジア・太平洋戦争が激しくなるなか、卒業は三ヶ月繰り上げられ、一九四一（昭和一六）年十一月である。

卒業論文のテーマは「湖広低地治水の意義——地政学的考察——」である。^②河野の一年前の学年から、教室を主宰する小牧実繁教授の指示で、卒業論文のテーマは、大東亜共栄圏にかかわる、日本が植民地とした台湾や朝鮮半島のみならず、海外侵略をねらい、欧米列強や国内勢力と衝突する東南アジアを中心に、南洋やインド、中東がとりあげられるようになった。^③海外文献を中心に地政学を指向した地誌研究を卒業論文のテーマとして選び、その成果や情報が戦争に間接的ではあるが加担した側面は否定できない。しかも、若手への研究資金の一部には、軍部やその関係団体などから供給されたことは近年の学史的な研究で判明している。^④当時の日本の地理学の状況は、東日本が東京帝国大学理科大学出身者（山崎直方、辻村太郎、多田文男、渡辺光ら）によって、これらの地域の資源探査や地図作製に関わるかたちで協力していった。それに対して、西日本、とりわけその中心にあった京都帝国大学では、地理学は基本的に人文地理学であり、しかも日本や東洋の地

図史や歴史地理学的色合いが強かった。しかし、そのような従来の方角性をもった日本国内の研究は、戦中期には急速に影を潜めていった。

河野は大学院進学を予定していたが、翌四二年二月には応召される。関東軍特別演習部隊に配属されて、中国東北部や華北の湖北省などで食糧輸送にあたった。敗戦後一九四六年に佐世保に復員し、京都大学にもどった。敗戦後、一九四六（昭和二一）年六月 京都帝国大学文学部副手、一九四九（昭二四）年六月には助手になった。戦時中の責任を問われて主任教授の小牧実繁は辞職し、助手であった米倉二郎、野間三郎なども公職追放となった。その大きな変革期に主任となったのが東洋史の泰斗、宮崎市定である。しかし教室の復興、運営の実際は立命館大学から迎えた織田武雄助教授であり、河野はその片腕となって教室復興に尽力した。

一九五〇（昭和二五）年三月には前年に新設された岡山大学法文学部に助教として着任し、新制大学の地理学教室の体制づくりに奔走することになった。岡山大学は旧制第六高等学校の流れを汲む総合大学である。この第六高等学校の校長を務めたのが京都帝国大学農科大学の農業経済学の教授の黒正巖^{こくしょう}である。その教え子である喜多村俊夫（一九一一—一九九三）がこの新制大学の地理学教室の開設のかかわる。この喜多村のもとで河野は助教として、岡山県各地や瀬戸内地域の漁業・漁村問題、さらには臨

海の埋め立てや工業開発が進むなか、公害・環境問題などの実証

的研究とともに、部落問題にも積極的に関わる行動する地理学者として活躍した。これらと併行して、河野は中国研究や日本と中国との地理学の学術交流の発展に貢献した。とりわけ日中地理学会の設立は、氏と中国側の代表である呉傳均氏との長年の交流で実現した。現在もその遺産は次世代や第三世代に引き継がれている。また、地域漁業経済学会（旧・西日本漁業経済学会）や京都市の部落問題研究所にも深くかわり、その小文まで含めた著作の多さと扱うテーマの広さは、その飾らない人柄とあいまって、思想信条を異にする人をも含めて人望を集めてきたことは特記できる。私自身は氏のごく晩年に警咳に接したただけだが、関西大文学部に奉職する者として、また同じ階の個人研究室棟に居る教員として、誇りに思っている。その教え子たちは、地理学の研究者のみならず、さまざまな分野で活躍し、その結束も強い。

前述の科研プロジェクトの概要についてはこれまでいくつか発表してきたが、その話者の生の声や質疑を公開することは、これまでメンバー⁵以外にはおこなってこなかった。聞き取りをした研究者の何人かがすでに鬼籍にはいり、すべての人が現役を引退し、相当の時間が経ってしまった。その一方で、この十三年という時間によって、より客観的、高所からアジア地域研究を観照することができるようになった。またこの間、新たな研究方法や視点、これまであまり注目されてこなかったアジアの地域が脚光を浴び

るようになった。

この「資料紹介」は、上のような経緯で二〇〇三年十一月二九日（土）に、関西大学高槻キャンパスの高学館で録音した元・関西大学教授、岡山大学名誉教授の河野通博氏の口述記録である。インタビュートとその質疑応答をテープから起こし、私が編集した。この研究集会の当日の参加者は十一名で、共通テーマを「草創期からの中国地域研究の軌跡」とした。河野氏には戦前・戦中に京都帝国大学文学部史学科地理学専攻卒業生を中心とした個別研究を中心に、石原潤（一九三九）氏にはフィールドワークに基づく科研グループでの中国の共同調査を中心、秋山元秀（一九四九）氏には日中地理学会議の設立前後の活動を中心に約一時間報告いただき、その後に参加者で質疑応答を行った。

河野の研究は、その領域の関心の幅の広さと眼光の鋭さ、地域やそこに生きる人々、とりわけ差別をうけ、苦勞を重ねてきた弱き人々への暖かいまなざしが際立つ。没後かなりたって、多くの人から河野の人柄や面倒見のよさを耳にする。以前はほとんどタイトルしか見なかった氏の論文や著作、氏に対して書かれたエッセーを、近年私も少しずつ読み込んでいくにつけて、希有の華のある奥深い研究者であることに對してますます尊敬の念をいだくようになった。とりわけ、瀬戸内海の漁業・漁村問題でも学位論文の『漁場用益形態の研究』未来社（一九六二）は今でもその包括的な視点や貴重な資料は輝きを失わないし、海のコモンズ論

などからもっと注目されてもよい。

二 アジア・太平洋戦中期から戦後にかけての

日本人地理学者による中国研究

以下の資料は人名やその生年を筆者の方で補い、小見出しをつけて、補足の注を付したものである。話題提供のあとには、質疑応答も発言者の名前を付して記した。なお、筆者の補注は文中に「」で示した。

河野 二年前白内障の手術で視力が〇・三になりました。ところが元来の近眼が手術で逆に老眼になったので、今度は近いところの活字が見えなくなりました。遠いところも近いところも、両方効かなくなつた。それともう一つは、耳が遠くなつた。その両方でもって、身体不自由な哀れな老人になってしまいました。悪しからずお許しいただきたいと思います。

皆さんからのご注文は、要するに「中国研究の集団的な調査研究について説明せよ」ということなのですが、人文地理分野で中国を対象とした集団的な研究をまともになさつたのは、ここにいらっしゃる石原潤先生が実は最初のはずで、それまでまともなものはありません。ですから、これはもっぱら石原先生にやっていただきたいと思ひます。私をご報告するのは、そこにいたるまでの個別研究にどのようなものがあつたのかといった、思い出でも

ない、聞き覚えたお話をしたいと思います。

文化大革命期をさむ中国の人文地理の復興と日中地理学者の交流

河野 と言いましても、一九四九年に中国が解放されて中華人民共和国になつたわけですが、それから後しばらくというのは、米中間の対立がありましたし、文化大革命もありました。戦後段階でしばらくの間は、ソ連以外の外国人研究者を中国は喜んで受け入れるというような状況にはなかつたわけです。中国側が無害有益であろうと判定した連中しか入れてくれなかつたこともありまして、なかなか外国の研究者が入れなかつた。特にソ連の影響で人文地理の受容は認められなかつた。

最初に大量に外国の研究者を受け入れたのは、おそらく一九六四年の北京シンポジウムが最初だつたと思います。幸いに私は、その前の年の昭和三八年に郭沫若が呼んでくれて、岡山の日中友好代表団が中国に出かけました。私もその一人に加えてもらつて行きました。訪問にあたっては人文地理学会の会長であつた織田武雄先生にお世話になり、北京シンポジウムには経済地理学会の代表として参加することができました。これが戦後の日中地理学者の最初の接触でした。

文革中は中国の研究者は、資本主義国の研究者から手紙をもらつていただけで疑いの目で見られ、思想改造施設に入れられたのですから、外国の研究者と文通もできなかつた。特に地理学の場

合は、ソ連の影響で経済地理学以外の人文地理はブルジョア地理学として否定されていたため、人文地理研究の必要を説いただけで右派分子として南京師範学校の李旭旦や東北師範大学の張文奎などは排斥されていたため、とても国際協力はできなかった。外国人で中国での研究や聞き取り調査ができたのは、文革の思想に共鳴したミユルダールやほんの少数の人に留まっていた。北京シンポジウムの参加者にしても、やはり広汎に参加を認めたのではなかった。その中で私が参加できたのは全く幸運なことでした。

そこで初めて、中国科学院院長である郭沫若の命令で、中国地理学会の代表と会うことができたのです。その時の先方の代表が、今でもまだ生きていますが、中国地理学会の前理事長の呉傳鈞氏と、呉傳鈞氏より南京中央大学で一年先輩になるのですが、南京大学の卒業生で南京地理研究所の所長を長く務めた周立三氏という人、それから呉傳鈞氏の奥さんで中国地理学会の秘書長を長く務めた瞿寧淑さんでした。瞿寧淑さんは、中国の革命運動をやっていた瞿秋白との親戚関係があるものですから、女性ですけれども隠然たる力を持っている人です。この北京シンポジウムで多くの人と顔見知りになりました。

そういう人たちと顔見知りになったのはよかったが、それ以後もっと交流ができると思っていたら、呉傳鈞氏は文化大革命で四川省の——石原先生たちが調査に行かれたあたりだと思えますが——少数民族地域の農村に放り込まれて牛飼いをやらされていた

ものですから、なかなか連絡が取れない。本日に日中両国の地理学者が話をできるようになったのは昭和五三年ですかね、一九七八年からです。つまり、毛沢東が死んだ一九七六年より後の話です。文化大革命の終結の直前、日中地理学会発足の前、一九七九年です。

というわけで、IGU（国際地理学連合）再加入の打ち合わせで、呉傳鈞氏たちが中国代表として日本に来て、東京にある国連大学を訪問して、ついでに金沢で開催された日本地理学会の秋期大会に顔を出して、その帰りに京都に立ち寄りしました。そのときに初めて、両方のコネクションが取れたわけで、それまではずっとか細い連絡だけでした。個人的には私と中国地理学会の会長であった竺可楨先生との間で、年賀状のやりとりをしていたぐらいです。それも文化大革命の間は不可能でした。

こうして初めてコネクションが取れて、一九八〇年に日本で行われた国際地理学会に中国が五名の代表を送ってきました。もともとこれにはいろんな連中が入っていて、全員が全員おもしろい。本日に中国の新しい地理学の代表であったかどうかとなると、必ずしもそうではないかもしれませんが……。古い地理学者もいたし、それから李旭旦のように人文地理学を復活させなければならぬという強い主張を持っていた人もいたし、いろんなメンバーが混ざって日本にやって参りました。そこから日中の交流が始まったと言えるでしょう。

この国際地理学会の後、先ず日本の地理学者の訪中が始まります。そして日中地理学会議が生れ、相互の相手国訪問が始まり、やがて日本人地理学者の中国訪問が盛んになります。そして中国から日本の現状把握のための研究者団体が来日し、中国での人文地理学専門委員会の成立を経て、日本の地理学者の現地調査に中国の共同研究者が加わることとなります。しかし、最初は中国地理学者の訪日の方が多くて、日本地理学者の方は調査よりも見学が主でした。そのうち改革開放が進むにつれて日中共同の調査という機運が高まり、日本からの研究者が先ず調査を始め、やがて日中共同の現地調査に移っていくわけです。それから後のことは、秋山元秀さんや石原潤さんに押しつけてしまえばいいわけで、私はいったって責任は軽いと思っておりますので悪しからず。

戦前における京都大学を中心とした中国の地理学・地域研究

河野 ご承知のように、日本で人文地理学の講座が初めて置かれたのは京都大学です。その最初の地理学の教授の小川琢治（一八七〇—一九四一）先生は、和歌山県の新田藩の漢学者の家に生まれられた方です。地質学者でありますけれども、漢学の素養が非常にありになる方です。だから息子の方も、素粒子論をやった物理学者（湯川秀樹）、東洋古代史学者（貝塚茂樹）、あるいは中国文学者（小川環樹）が出ていて、お子さんたちがそれぞれ親父の一部分を引き継いでいらっしやる。

この小川先生がやはり中国には強い関心をお持ちになっていたし、京都大学への就任の交渉を受けられたのも、先生が現在の吉林省の延吉付近で地下資源の調査に入っておられる最中だったわけです。中国の現地調査という点でも、草分けの一人であったと言えらると思います。小川先生ご自身も漢学者の家柄のご出身ということもあって、中国の研究をなさって、『支那歴史地理研究』（一九二八）や『統支那歴史地理研究』（一九二九）といった歴史地理の研究、特に古代の周代から秦、漢にかけての古い典籍を利用したご研究を多くなされ、『穆天子伝』とか『山海経』などの研究もやられた。また、歴史時代のことにかけて、『戦争地理学研究』（一九三九）という、中国の栄枯盛衰のなかでのいろいろな戦場の戦略地理学的な説明がどのようにできるかというような研究もされました。

小川先生とご一緒に京都大学の地理におられた助教の石橋五郎先生は、小川先生と少しニュアンスが違って、むしろ現代の地理学の方に力点がありました。特に神戸におられた関係もあって、貿易関係を中心にしたご研究が多かったように思います。そういう二つの違った傾向というのが存在したこともあり、両方の先生の影響を受けた人が出てこられたわけです。ただ、石橋先生は胸が悪かったせいもあって、学校にあまりお出でにならない。吉田にいらしたのに、講義にみえる時はわざわざ人力車で京都大学まで来られるという状況だったので、ご講義の時間も少なかった

し、お弟子さんも相対的には少なかったと言えるでしょう。それに比べると、小川琢治先生は途中で理学部へお移りになって、地質学教室を創設なさるのですが、それ以後も地理のお弟子さんがかなりあり、影響力は大きかったと言えらると思います。

お配りしたプリントの最初の方に、個人の名前が書いてございますが、これが小川先生以来、敗戦までに京都大学の地理学教室で、中国に関連することを研究した人たちの一覧表でございます。もっとも一生を通して中国のことしかやらなかったという人はめったにいません。

田中秀作先生は彦根高商（現在の滋賀大学経済学部）の先生でいられた方ですが、この人は中国の特に満州の人口を研究された方です。藤田元春（一八七九—一九五八）先生は、通称ヨタハルという名で知られた三高の先生でございます。ヨタハルという名前が付いたのは、関東大震災で三浦半島が地盤隆起で何百メートルも上昇したと、とんでもない単位の地盤隆起が起こったとおっしゃったものだから、学生からヨタハルというあだ名を付けられたという人です。卒業論文が黄河の治水問題で、それ以来ずっと中国をやつていらつしやる。だけど、藤田先生もどちらかと言うと文献を基礎にした歴史地理学をやつてこられた方で、特に、日本と中国との長さの単位である「尺」についておやりになった。『尺度綜考』（一九二九）は戦後もリプリントされましたから、ご存じの方も多いと思います。藤田先生は民家の歴史を研究され『日

本民家史』だとか、日本の歴史地理や地図の歴史についての研究でも有名な方なので、そちらでご存じの方も多いと思います。中国の地誌についても、例えば揚子江や黄河についての解説書などを新聞社から出したりしておられます。いずれにしても文献地理学的な性格が強い方です。藤田先生の影響で民家の研究をされた鳥之夫（一九〇七—一九八八）さんも日本の民家だけでなく、『満州国民屋地理』（一九四〇）の著書があります。

いま申し上げた田中先生と藤田先生のお二人は大正年間のご卒業です。そのあたりの先輩はいろいろおられまして、同じ大正九年卒業の伏見義夫先生にいたっては、大学に五年か六年いたかと思えます。ですから大正九年と言つても、案外歳をくつている人が多くて、正確ではございませんが藤田先生も確かもう少し歳をとつておられたと思います。

それから後になって昭和に入りますが、地理で言うところ村松繁樹先生と同じ昭和三年卒業の大先輩に当たりますが、入江（久夫）さんという方が満鉄調査部にお入りになりました。これをきっかけに、それ以降、満鉄調査部に地理の卒業生が次々と採用されることとなります。例えば、増田忠雄さんとか、山口平四郎（一九一〇—二〇一〇）さんがそうでございます。入江さんは確か、国境問題、民族問題をやってらつしやいました。山口さんは現在の朝鮮民主主義人民共和国の日本海側にある三つの港——羅津・清津・元山——の運輸地理学みたいなものを研究されていた方

す。この研究は確か『地理論叢』（京都帝国大学地理学教室刊行の紀要）に出ているはずですが。そういったかたちで、いわば地理屋の集団が日本でなく、当時の満洲にひとつできたということが言え、これはやはり注目に値するけれども、ただ三人が共同で特定の問題を一緒にやるというかたちにはならなかった。それぞれが専門をもって、その分野で研究をするに留まりました。

次に宮川善造さんですが、彼はご承知の通り、現在九州大学におられる「現在は退職」宮川泰夫さんのお父さんです。太平洋戦争が始まる少し前、確か昭和一五年に、満洲国の新京―現在の長春ですが―にできた建国大学の地理学教授になりました。その宮川さんのもとで建国大学の助手をやられたのが浅井辰郎（一九一四―二〇〇六）さんです。今は、中国よりはアイスランドとの友好の方の仕事を主にやっておられて、この前アイスランドから勲章をもらわれました。浅井辰郎さんは、京都大学にいらながら専門で勉強したのは気候学でした。ですから地理教室にいらながらも、地球物理に行つて、地球物理の方で気候学を主に研究なさっていました。お父さんは浅井治平さんという古くからの地理学者です。浅井さんと宮川さんとが建国大学にいらつしやったので、満洲にはかなりいろいろな地理屋さんが集まってきたわけですが。それと一緒に問題をやっていただければ、一つの大きな力になったと思うのですが、残念ながらそこまではいかなかったということですが。

朝井小太郎さんは織田武雄先生の一学年上の昭和六年ご卒業で、実は私も朝井さんは存じ上げていません。朝井さんはむしろ戦後、解放後の中国にとっては大きな功績のあつた方だそうですね。広東省の農業地理の研究で仕事をしていられるらしいのですが、よくわからない。広東に住んでいるらしいのですけれども、私たちが広州に行つた時には連絡が取れなかった。昭和六年と言いますと、その同級生に米倉二郎先生がいらつしやいます。ご承知のように米倉先生は条里制の問題などを研究されてきました。この条里制の問題の研究の過程で中国の井田制もおやりになり、中国やユーラシアの耕地地割の問題に入つて行かれたわけですが。米倉先生は和歌山高商、つまり後の和歌山大学経済学部でいられて、そのあとで山口高商、つまり山口大学経済学部の先生になられた。それから織田先生も、どちらかというと小牧先生や石橋先生に素直に行かれた筋とは一肌違ふところがありました。卒業論文が「亀岡盆地の自然地理」なんです。やりたいことを自由にやられた自由奔放なところのある方です。その織田先生が戦争中にご自分でいろいろな文献を漁りながら、中国の綿の問題とか、四川省の桐油の話などを書かれた。織田先生にはご迷惑かもしれませんが、お若い時のお仕事があるということ、ここで挙げさせていただきました。ちょうど関西学院高等部におられた時代のお仕事です。

その後になりますと、しばらく間が空くのですけれども、昭和

一一年頃の卒業生になると、にわかによく出てきます。例えば、西村睦男、神尾明正、庄司久孝、須藤賢、村上次男^⑦さんなどです。

このなかで西村さんと庄司さんに少しふれておきましょう。西村さんは奈良大学の学長でいられた西村睦男（一九一五―二〇〇六）さんです。庄司さんは、島根大学、それから岡山大学にお勤めだった方です。ちよつと早く、昭和三〇年に亡くなられてしまいました。このお二人は、卒業論文もそうだったと思うのですが、御尊父が台湾で勤務しておられたので、台湾育ちで旧制の台北高等学校のご出身です。台湾についての卒業論文をお書きになりました。それとよく似たような方としては、卒業は一年早い昭和一〇年ですが、小葉田亮さんがいらつしやいます。日本史の小葉田淳先生の令弟です。

少し後になりますけれどももう一人、川上喜代四さんがいらつしやいます。川上さんはお兄さん^⑧も京都大学の地理の卒業生です。そのお兄さんが外務省にお入りになって、日本の北方問題、つまりロシアとの間の国後と択捉とを挟んでの国境問題についての権威として、外務省では顔が売れた方です。どちらも台北高校のご出身です。もつとも弟の川上さんの方の卒業論文は、台湾ではなかった。川上さんは卒業論文で航空交通の問題をやられて、近い将来、世界の航空交通は北極を通過してアメリカとヨーロッパとを結ぶであろう、という予言みたいなことをやられた。まだその当時は、北極を越えての欧米の連絡は実現していなかったのですが、予言

者みたいなことを言われた偉い人です。後に海上保安庁の水路部長になりました。

川上さんも台湾のご出身ということですが、この頃は台湾出身の京都大学の地理の学生さんがたくさんいました。この方々が台湾の地理学的な研究を随分とやられました。日本の植民地には朝鮮と台湾があったわけですが、台湾の方はこの他にもう一人、東京大学ご出身の富田芳郎^⑨という大先生がいらつしやいます。この方も含めて、地理の研究者は台湾とは縁が深かった。それに対して、朝鮮の方はあまりいない。全く朝鮮の研究をやられた方がいないのかというと、そうでもなくて、例えばお墓の研究などがあります。文化人類学的なものでありますけれども、朝鮮のお墓の研究は朝鮮総督府が報告書を出しております。そうしたかたちで総督府の調査報告のなかに、かなりいろいろな資料が出てきています。ところがそれが、ある学問分野の研究者の報告書というかたちでは、あまり出てきていない気がします。これはいつたないなぞだったのだろうかと疑問に思っています。

現在では、樋口節夫さんをはじめとして、韓国研究をなさっている山田正浩君もおられます。いろいろと地理屋さんによる朝鮮半島の南半分の研究は増えてきている。これはたいへん心強く思っている次第ですが、もつと多くの方の成果を期待します。

それと同時に、先ほど申しました神尾明正、須藤賢、村上次男といった方々は、どちらかというところ、支那事変が始まってから華

北でそれぞれ勤めながら調査活動をやっておられた。例えば、須藤賢さんがそうだったと記憶しているのですが、華北交通、華北の運河交通の会社に入っただけで、水運の研究をやっておられた。しゃつた。それと華北交通の汽車の方の研究もやっておられた。神尾さんの方は具体的な研究が出てこないけれども……。そうした方々が華北で働いていらしたことは知っています。

あと彦根にいらっしやる川崎「長谷部」健史さんは、記録映画を本職にしておられて、戦争中に日本で砂丘の映画をお撮りになっただけで有名になりました。向こうでも確か記録映画を撮ることになっていたと思うのですが、どうもはつきりといたしませんが。

先にふれた西村「陸男」さんは台湾のご出身。それから浅井辰郎さんは、先ほど申しあげたように建国大学におられて……。後で申しますが、探検地理学会の活動もあります。それから、三上「正利」さん。三上さんは京都大学の助手をずっとやっておいらっしやった方で、後に愛知県の豊川にできた女子高等師範学校（女高師）の先生になりました。お茶の水と奈良以外にできた三番目の女高師です。その後は九州大学に移られて、亡くなられるまで九州大学にいらした。この三上さんは藤田元春先生の愛弟子で、中国内陸部の研究をやっておられて、それから後に戦争突入となりましてから、中国内陸部と国境を接しているシベリア地域の研究に移られる。戦後はずっとシベリア研究をやっておられました。

戦中期の中国地域研究と探検地理学会

河野 さて、これからの話は戦争中の学生たちで、実は私もここに含まれます。私が中国研究を始めたそもそのきっかけは、紀元二千六百年だから昭和一五年に、小牧先生が「お前たちは卒業論文に日本のことを書いたらあかん。外国のことをやれ」と言われたことにあります。とは言っても私は実のところ横文字が嫌いだったものですから、それならば漢文をやらうと。それで中国語の文献を読み始めました。「湖広低地治水の意義」という何だか訳のわからないテーマで、武漢三鎮「武昌、漢口、漢陽の三市の総称」のあたりの水害問題を取り組み、無事卒業できました。

このあたりから、地理の雰囲気がちよつと変わってくるわけです。

私の二年下にいたのが川喜田二郎君です。川喜田二郎君は、もともと探検や山登りが大好きな人で、三高から京都大学に來られたのですが、三高時代に探検部の活動に夢中になって二年続けて落第してしまった、彼は探検が好きで山登りばかりやっていたものだから、単位が取れなかったのですかね。当時は旧制高校を二年続いて落第すると退学ということになっていたのです。ところが退学させられる間際になって、「あの男は見所がある」ということになり、教師たちが皆で必死になってカバーしたこともあって、不思議と退学せずに助かったという強者が川喜田君でした。それから伴豊君というこれまたおもしろい男で、強者がいました。

伴君は昭和一六年に内モンゴルに一人でトコトコと出かけて行って、現地軍に「うん」と言わせて、モンゴル共和国との国境地帯に入りこんで、最前線まで顔を出してきた人です。ただ、惜しいことに胸を患ってまもなく亡くなりました。彼が生きていくと、たいへんおもしろい地理屋さんができただろうと思うのですけれども：残念です。

小池洋一君は水戸の出身で、和歌山大学の先生をして、最後は鳴門教育大学の先生になった人です。まだ生きています〔現在は故人〕。彼はむしろ戦後なのだけれども、朝鮮民主主義人民共和国の蓋馬(ケマ)高原の住民の話を書いた人であります。これは『人文地理』に出ております。おやおやっと思われる方があるかもしれません。海野一隆(一九二二—二〇〇六)君も中国研究に關わっております。「海野一隆といえば地理学史というより、地図学史じゃないか。」と思われる方も多いと思います。確かに彼は、戦後は室賀「信夫」先生と同じように、日本の古地図の研究をやった人でございます。そっちで有名な人物です。大阪大学におられました。卒業論文は揚子江の民船、揚子江を上下していた木造船の船舶交通の問題を書いています。

この海野君あたりまでが、戦前、中国に関して多少なりとも關係を持った人たちです。もちろん地理屋以外に、中国關係をやるのでは、歴史学者のなかに歴史地理学者がおられます。それが森鹿三¹⁾(一九〇六—一九八〇)先生と日比野丈夫(一九一四—二〇

〇七)先生のお二人であります。これより後に、船越「昭生」君や秋山「元秀」君を始めとして人文科学研究所の助手を務められた方々は東洋史ではなく地理屋さんの歴史地理学者です。戦前に地理出身者はおりません。東洋史の側から地理に首を突っ込んできた人は、この二人以外には米田賢次郎(一九一九—一九九〇)氏あたりでしょうか。それに東京都立大学「退官」の佐竹靖彦(一九三九—)氏も東洋史のなかでは地理学的なことをよく書いています。

研究者集団としては、先に少しふれましたが、探検地理学会がございます。探検地理学会は、親玉は今西錦司、ゴリラの先生であります。今西さんは自分が引つ張ったというよりはむしろ、押し上げられちゃったと言ったほうがいいと思います。今西さんを中心として三高の探検部の連中が初めに仲間づくりをやっている、それが三高から京都大学に入ってきて、探検地理学会なるものをつくりあげたと言うほうがいいかと思えます。

ですから、その中心になっていたのが梅棹忠夫(一九二〇—二〇一〇)氏、それから大阪市立大学にいて後に琵琶湖研究所長をした農業氣象学の吉良竜夫(一九一九—二〇一一)氏、それから大阪府立大学にいて後に鹿児島大学に移った中尾佐助(一九一六一—一九九三)氏です。もう少し上の人もいるけれども、こうした人たちが探検をやるということで集まり組織づくりをしたのが探検地理学会でした。その呼びかけに応じて、ならば入ろうかと入

ったのが浅井辰郎さん、それから川喜田二郎君は当然入る。そして、おっちょこちょいで地理屋から入りこんだのが私の学年でして、私と池田光二君です。それから戸川俊正君。この戸川君も台湾育ちで旧制六校出身ですが、台湾総督府の皇民化運動の批判など、よく聞かせてもらいました。卒業論文ではフィリピンを扱っています。

ただ池田君や戸川君は昭和一六年、つまり三年の時にポナペ島の探検があつて、行くか行かぬかで随分と迷つたのですが、小牧先生は必ずしも賛成じゃあなかつた。探検という言葉をかなりきつく批判なさつて、「ヨーロッパの帝国主義的侵略の象徴や」と言われるものだから、「これはあかん」となつて、私たち三人はポナペ島には行かなかつたのです。そして卒業すると、とたんに軍隊にとられてしまいました。というわけで我々はその学会運営の核ではなくなりました。

実は探検地理学会をつくる前の準備作業として、まずどういう活動をやるのか、モデルにする活動をやってみようということ、梅棹君が実験を申し出て、サハリン(樺太)のホロナイ(幌内)平野に出かけて、そこで越冬をやるわけです。つまり寒い湿原地帯で、どのようにして冬を越していくかという実験を大学2年の時にやったのです。それで自信を得て、学会をつくつたわけです。鳥の調査で、これを探検と言つて、成果を挙げて報告書もつくり

ました。それから一転して、大陸を調査することになってきます。それで吉良竜夫氏が先頭を切つて白頭山(ベクトゥサン)に行つて、天池のあたりの調査をやつてまいりました。これは、日本の植民地であつた朝鮮と中国「吉林省」との国境地帯の調査です。

その次に本格的な調査としてやつたのが、大興安嶺の探検であります。これはまさに、中国に対する集団的な科学調査の皮切りと言つていいかと思ひます。この成果は朝日新聞社から刊行されました。こういった組織的な調査をやつて、名前を挙げたわけです。これはどつちかと言うと、社会科学ではなくて、自然科学的な、ないしはそれに文化人類学的なものが多少加わつた調査であつたわけです。

それに対して、あまり現地には入つて行かずに、むしろ文献だけで、太平洋戦争の日本軍に協力するというかたちで結成されたのが皇戦会であります。これには陸軍の参謀本部の働きかけがあつた。私は皇戦会の組織には全く関係しておりません。入るよりも先に、兵隊に行つてしまいました。皇戦会について詳しく書いていらつしやるのは村上次男さんと、古今書院から出た『続・地理学を学ぶ』¹³⁾(一九九九)に具体的な解説が出ています。

研究会の事務室は京都の吉田山「京都市左京区吉田神楽岡町、京都大学の東に隣接する孤立丘陵、標高一〇五メートル」にあつたそうですが、一軒家を借りられて、そこで日本の進むべき道とか、戦略的な目標についていろいろ討論して本を書いたわけです。

白揚社という本屋から出された本ですけれども、そのなかで最初に出たのが室賀先生の『印度支那』（一九四一）、それから別技篤彦さんの『蘭領印度』（一九四二）でした。その後『トルコ』が出て、それから『インド』が出る筈だったのかな。これは全部は出なかった。それぞれの方が分担されて、執筆の準備をしていたと言った方がいいかもしれません。一部の人のご報告は出ましたけれども、全部は完結しなかったわけです。室賀先生の場合は、胸の悪い方ですから、ご自分で調査に行くわけにはいかなかったし、主にフランスの文献、アルマン・コランから出た文献を利用して、それを編集し直して『印度支那』をお書きになったわけです。別技さんも同じように、オランダなどの文献を使いながらインドネシアについて書かれた。

この他に戦争中に一定の調査が行なわれたものとしては、東京大学のグループによる調査があります。主なところでは、当時は助教授で後に教授になられた多田文男先生の指導の下に、東京大学地理教室の若手や中堅の人たちが調査をされた。一つは、現在の内モンゴル自治区ですけれども、当時の熱河省—満洲国です。一つは、もう一つは、山西省の調査で、この二つが公刊されています。

それから最近退官されて現在は名誉教授になっておられる明治大学の石井素介（一九二四—）さんも、この頃の中国を調査されました。石井素介さんが思い出話として書いていらっしゃるけれ

ども、当時の満洲国、興安嶺の北にあたる興安北省—満洲里の少し北の黒竜江に沿ってシベリアと境を接している地域ですが—その白系露人、つまり第一次世界大戦後に満洲に逃げてきたロシア人たちの農村の調査報告がごございます。ここらあたりはトラックでもないと思って行けない地域ですから、もうかなり日本軍の援助があつて、輸送には軍のトラックを使っています。

その他に地理学者が中心ではないのだけれども、もう一つごございます。地理学者が入っているものとして、蒙疆研究所という蒙古の研究所がありました。あれもまた、張家口やフホホト（呼和特）にもあつたことがあるし、ずっと同じところにいたのでなかったと思うのですが、とにかくモンゴルに行つてモンゴルの研究をやつた。いろいろなメンバーがいるのです。例えば、「蒙古源流」を翻訳した江實という言葉学者も入っているし、飯塚浩二（一九〇六—一九七〇）大先生まで関係している。それから川喜田二郎君のお姉さんの旦那さん、有名な社会学者の岡正雄（一九八八—一九八二）さんも入っている研究所です。これがモンゴルの調査をやつてたいたのですが、完全な刊行物はほとんどなかったと思います。

思い出せるのはそれくらいです。他にも何かあつたとは思つていますが、またそれは補足していただきたいと思ひます。

参考資料（発表時配付資料）

*原文は横書。

- (1) 戦前期京大地理関係中国研究者リスト（小川琢治教授のほか）
田中秀作（T4、彦根高商）、藤田元春（T9、三高）、入江久夫（S3、満鉄調査部）、宮川善造（S4、建国大）、島之夫（S5、高津中）、増田忠雄（S5、満鉄調査部）、朝井小太郎（S6）、米倉二郎（S6）、和歌山高商、織田武雄（S7、関西学院）、山口平四郎（S9、満鉄調査部）、小栗田亮（S10台湾）、神尾明正（S11、華北）、庄司久孝（S11、台湾）、須藤賢（S11、華北）、村上次男（S11）、西村睦男（S12、台湾）、浅井辰郎（S14、建国大）、三上正利（S15、京大）、河野通博（S16）、川喜田二郎（S18）昭和通商？）、小池洋一（S18）、伴豊（S18）、海野一隆（S19）〔東洋史歴史地理〕、森鹿三（S3、人文科学研究所）、日比野丈夫（S11、人文科学研究所）

注：○は早生まれ

(2) 探検組織

- (a) 探検地理学会（会長、今西錦司） 会員 梅棹忠夫、吉良竜夫、中尾佐助、浅井辰郎、川喜田二郎、伴豊、（河野通博、池田光二、戸川俊正）

調査活動

第1回はマリーシャル群島ボナペ島。その後、吉良は白頭山調査、組織的には大興安嶺調査。伴は、一九四一年内蒙古とモンゴルの国境地帯調査、大興安嶺の報告書は朝日新聞社より刊行。

- (b) 皇戦会の大東亜地政学叢書の刊行（小牧先生主催）
印度支那（ベトナム、ラオス、カンボジア） 室賀信夫
蘭領印度（インドネシア）、トルコ（野間三郎） 未完分担者
インド（浅井得一）、イラン（松井武敏）
- (c) 東京大学の調査活動（主として多田文男助教の指導）
1. 熱河省赤峰付近

2. 山西省黄土高原地帯

3. 興安北省の白系ロシア人農村（参謀本部の委託）
（石井素介 明大名誉教授等参加）

- (d) 蒙疆研究所？（張家口 フフホト）
メンバー 飯塚浩二、江實

質疑応答

秋山元秀 このレジユメでは蒙疆研究所に疑問符を付けておられますが、何か施設や組織として存在したのですか。

河野 あれはモンゴル研究所だったですかね。正式な名称は忘れましたが、「一九四四年に日本軍支配下の蒙古聯合自治政府の首都張家口に設けられた西北研究所をさすと思われる」。

秋山 張家口ですかね。

河野 最初は張家口で、後からフホトに移ったと思います。

秋山 張家口は、たしか藤枝晃さんの班じゃあないかと思うのですが…。

河野 そうか、あの人もいたなあ。

秋山 東洋史関係でも結構いたのでは…。

河野 東洋史関係の調査グループもかなり入っていますね。大同の雲崗石窟をやったグループ（小野勝年さんなど）。

秋山 水野「清一」¹⁴さん。

河野 水野さんもそうだし、それから…。

秋山 長広「敏雄」さんも行ってゐるし…。

河野 長広さんもちろん行ってゐますね。あのグループは…。

秋山 山西省のあたりは日比野「丈夫」さんなんか随分と…。水

野先生と日比野先生は山西の五台山とか…。

河野 そうか、行っておられる。東洋史の方々は抜かしてしまつていました。

秋山 しかし、蒙疆研究所「西北研究所のこと」というのは総合的な研究所ですよ。

河野 かなり幅が広い、何でもかんでも蒙古研究関係の侍みたいなのをかき集めたという感じの研究所。

秋山 上海の東亜同文書院の地理はあんまり…。

河野 あれは、地理は馬場敏太郎⁽¹⁵⁾(一八八五—?)さんしかいないでしょう。物産地理的な記述が主だった。伊藤武男さんのところね。あそこに地理はいなかったような気がする。もう少し地理が入っていると、おもしろいのですけれどもね。いろいろと抜けたところもありましたが、そんなところで話題提供をさせていただきました。お粗末なことで申し訳ありません。

河野 どうもありがとうございます。まだ少し時間があります。何かご質問あるいは、何かありましたら…。

松村 中国では、軍が作った地形図がありましたよね。

河野 そうだ。その話をするのを忘れてゐますね。

松村嘉久 あれは、地理とはあまり関係なく、軍の方でやってい

たのでしうか。

河野 東亜輿地図、疆城輿地図か。あれは東方文化研究所(後の京都大学人文科学研究所)でやっていました。森鹿三先生、地図屋さんの小野三正さんの苦心の傑作です。これは別として、それ以外の地図はやはり参謀本部ですね。航空測量もやっています。特に昭和一三年でしたか、徐州作戦の後で、蒋介石が黄河を切つて大洪水を起こしますよね。あの洪水地域の航空写真というか航空写真測量による製図はいろいろあります。現在では復原されていますけれども、あれは五万分の一ですか。それから二〇万分の一もあり、これは北京派遣軍の測量部隊の製作です。中国が支那事変前に作った五万分の一地図もありますが、不正確です。日本も満州は作っています。それから東亜輿地図もあります。

秋山 上海あたりは二万五千の地図が…。

河野 あつたと思いますが、京大にはありませんでした。戦前大縮尺の中国の地図は京大にはなかった。

石原潤 いま我々は小林茂(大阪大学「現在は退官」)さんを中心とする研究グループで、参謀本部の外邦図の研究をやつてゐるのですけれども、この前そのメンバーでアメリカ合衆国に行きました。というのは、日本軍の航空写真がアメリカへ行っておりまして、まさしくそのあたり、揚子江の北のほうがありました。そのことでお聞きしたかったのですが、参謀本部は一般的

な地形図をつくると同時に、現在の北朝鮮にあたる地域で、兵要地図という作戦に関わるいろいろな情報を書き込んだ資料をたくさん作成しているようなのですが…。

河野 作っていますね。但し、軍事極秘で一般には公開しなかった。軍だけの検討材料にしていたはずですよ。

石原 それに地理学者が動員されるとか、そういうことはなかったのでしょうか。

河野 動員されたとなると、だいたい東京大学ですよ。だけどそんな地図は、軍内部だけで使っていたと思います。軍用地図は機密で軍以外の人間には見せなかった。日本の軍部はそんなに公開的ではなかった。敗戦後は参謀本部で地図の処分をやったようです。ただその一部を東大の学生さんが持って帰りました。日本沙漠学会の会長をしていた小堀巖さんなどが東大に持って帰り、後に各大学に分配したものがあります。

石原 小堀巖（一九二四—二〇一〇）先生はよくご存じですか、そのあたりの経緯は。

河野 あの当時とすると、小堀君が一番よく覚えているでしょうね。但し大部分は焼かれました。

石原 多田文男先生などが関わりを持っておられたことはわかっているのですが、小堀先生とは知りませんでした。

河野 私は小堀君から、戦後に焼かれそうになった参謀本部の地図を少しもらっています。

石原 そうですか。

河野 彼が持っていた地図が浅井辰郎さんを通して京大や東北大に入ってきているはずですよ。

石原 そのあたりのルートはだいたい押さえたのですが、個人的に持っておられる方があちこちにいらつしやるようで、そこまではちよつと…。あと、兵要地図とか、そのための兵用地誌というのがかなりできていたと思うのですが…。

河野 あると思います。実は私も、向こうで作戦用にもらっているのだけれども、兵用地誌の図は、参謀はもっていたでしょうね。我々のような下っ端まで来ないけれども。

石原 そうですか、なるほど。

河野 ただ私はもう戦争も終わりがけのあたりに中国本土に入ったので…。昭和一九年に入った時にもらったのが、黄河の氾濫地域から西の京漢線、現在の京広線の沿線の地図でした。それから龍海線に沿って洛陽のあたりの地図ですね。それを持って帰ろうとこっそり自分の荷物に入れていたら、悪いことはできないものでね、復員のために鄭州駅で貨車に乗り込んだ時に、その行李ごと盗まれてしまいましたね。お手上げになりました。

石原 一〇万分の一ぐらいですか？

河野 一〇万分の一でした。大部分は日本の陸地測量部が、空中写真をもとに作った一〇万分の一地図でした。参謀本部でつくったけれども、実際には北支派遣軍陸地測量部支所が作ったの

でしょうね。ただそれも、京広鉄道と隴海鉄道に沿った部分はある程度は詳しいのだけれども、それより西の部分や鉄道から遠い地区などはなかった。そもそも西の部分は中国製の五万分の一を大あわてで複製して、それを配っていましたね。だから私たちがもらったのも二種類あって、航空写真の方は村の位置も正確で間違いないが、中国製の五万の方は集落の位置も怪しかった。歩いているうちに、「ここ違うんちゃう」ということがよくありましたね。

秋山 軍隊の中では、どのレベルまで地図を配っていたのですか。
河野 小隊長以上の将校。だから数からいえば、たいしたものだろうね。あれはどうしたのだろうか。中国軍が敗戦後に全部押さえたのかなあ。

秋山 一〇万の地形図は、もう現地で押さえられたのでしょね。
河野 確かに参謀本部には、かなりいろいろな地図があったように、特に主要な都市というより、県城程度の町の地図はいろいろあったようですね。私も全部は見えていない。二、三箇所しか覚えていません。

秋山 民国になると県城単位の地図は、どんどん出ますね。
河野 出ていますね。

松村 その頃の京都大学には地方志などはあったのですか。つまり県志とかいわゆる方志の類のもの…。
河野 いろいろありましたよ。人文〔京都大学人文科学研究所〕

が一番多く持っていた。

秋山 人文は出来た時にかなり買いましたからね。

河野 文学部も東洋史に翻刻はあったけれども、そうですね…、省ですかね、県はない。

野間 その頃の例えば先生が湖広低地の水害の卒論を書かれる時などは、どのような資料に使われたのですか。

河野 今から言えば資料不足ですが、『湖北通志』が主ですよ。それから「揚子江水利考」という便利な本がありまして、それを利用しました。これは幸運にも彙文堂で手に入れました。ところが那波利貞先生に、「お前のこの詩は、孫引きで字が違っている」と言われて、頭をかきましたよ。その他は日本人の著書と水路部の資料です。

石原 新しい統計の類などは…。

河野 卒論を書いた時ですか？、結局は『満鉄調査月報』に載っていた数字しか使えない。中国側にも正確な統計の公表はなかった。彙文堂書店に行っても、そういう新しい現代的な資料よりは古いものが主でしょう。新しいのはなかなか掴めなかった。『揚子江水利考』が見つかって助かった。参考文献は『人文地理』第一巻二号に載せています。

秋山 せっかくの機会なので是非ともお話を伺いたいのですが、戦前の中国研究には、日本の研究者の方ももちろんなのだけれども、中国側にそうした方はいらっしやったのでしょうか。

現在の状況では、カウンターパートとして中国側の研究者と一緒に仕事することがよくあるのですが、戦前はどのようなかたちで研究をされていたのでしょうか。

河野 それはね、つまり日中両国がバラバラですよ。共同研究なんかはほとんどできていない。特に私が学生になったのは昭和一四年ですからね。もうチャンチャンバラバラやっている最中だから、共同研究なんかとうていできない。輸入されてくる上海版のいろいろな印刷物が利用できる程度ですよ。中国側も文献類を四川省などに運び入れて、大学を奥地に移して研究しているわけで、日本との協力などあり得なかった。このことは竺可楨さんの日記が刊行されていますので、それを参照して下さい。

秋山 それからもう一点は、当時日本以外の外国人が書いたものとか、そうした人たちの活動というのは……。

河野 やはり一つはバックでしょうね。パール・バック (Pearl Buck) の旦那のロッシング・バック (Lossing Buck) ですね。あれが南京の金陵大学にいた当時、つまり戦争開始前の刊行です。それから、かなり入っていると思います。あの当時はアメリカでもあまりいなかった。せいぜいクレッシュー (Cressy) の概説があるだけでした。あれでは地域的分析は不可能でした。概論だけ。

秋山 英語圏にはジオグラフィ・オブ・チャイナ (*Geography of*

China) というような本がたくさんありますね。イギリスにはそれこそ香港以来の具体的な政治研究や経済研究などを背景とした地域研究がかなりある。自然科学も一方で、植物学とか動物学とかありますし、(ドイツには) リヒトホーフエンの研究もあります。国民党政権の初期には随分とあった。日中戦争が始まった段階では……。やはり中国側は地理というと、主として自然地理というか、気候学や農業関係の土壌学や気象学が盛んでした。また史地研究というかたちで歴史と地理を一緒にしたものを出していますね。

河野 結局、周立三、呉伝鈞あたりの南京大学を昭和一〇年前後に出た連中が、ある程度人文地理をやっていましたね。但し対象地域は非占領地区で、日本人は入手できなかった。

秋山 イギリス留学組ですね。

河野 そうそう。研究地域も非占領地域で活動しています。

秋山 その前はやはり竺可楨さん、浙江大学ですからねえ。

河野 そうそう。

秋山 浙江大学で竺可楨に教わった階層があると聞いたのですが、彼はその学長をしています。

河野 ありますね。彼の影響はやはり大きいですからね。それと中山大学も若干ありますね。ただし、中山の場合は、黄秉謙さんをはじめ自然地理学者が多いですよ。

秋山 北京は占領されてしまうから、あまり研究活動ができる状

況じゃなかったでしょうね。昭和一〇年代くらいになると。その初期の段階では、もちろん北京でも…。

河野 当時の北京では地理は清華大学にあった。清華もどちらかというと、自然ですね。

秋山 歴史地理の流れは？

河野 あるんやなあ。侯仁之みたいに。

秋山 そうそう。まあそれは顧信剛の伝統で、むしろ歴史につながる…。

河野 そうです。はっきり言って中国でもね、地理は随分と冷や飯を食わされているからね。福建師大がいい例だとされるけれども。陳橋駅のようにせつかく集めたカードを文革中にバラバラにされてしまった人もありましたからね。

秋山 清華大学の地理が北京大学に移るのですか。

河野 当時の地理の教員は清華大から北京大に移りました。

秋山 終戦というか、向こうの解放の四九年から六四年の間は、先生も直接触れようがなかったわけですね。北京シンポジウムまでの間は…。

河野 六八年秋までなかった。六八年一〇月末に行った時、最初は向こうの地理屋さんと連絡が取れるかどうか自信がなかった。こっちが持っているのは織田先生から預かった『地理学文献目録』一冊だけだったし…。それをうやうやしく献呈しただけでした。

秋山 その時に呉さんや周さんは南京から出てきたのですか。

河野 いや、あの時は杭州で地理学会の総会があった。それが終わった翌日に会っているわけです。帰国する前だったけれども、北京で郭沫若が「お前たちはこれから上海に行け」と言ったのです。「上海に行ったらいいことがあるだろう」とそれだけしか言わない。行った翌日に初めて、中国地理学会の代表と会えることが分かったのです。

野間 そろそろ時間が参りましたので、このあたりで…。河野先生、どうもありがとうございました。

河野 どうもありがとうございます。

三 まとめ

河野通博が語る京都大学の地理学教室を中心としたアジア・太平洋戦争期から戦後にかけての中国研究は、大きく二つの流れが指摘できる。もともと京都帝国大学文科大学には漢籍を中心とした東洋学、シナ学の確固とした伝統があり、それをひきついだ古地図史や古代以来の歴史地理研究があった。しかし小牧実繁が一九三七年以降に学生や教室の助手・大学院生・学部生らに指示したのは、中国・台湾・東南アジアをはじめとする軍事戦略の地誌的情報を軍部に提供する意図も含んだこの地域の地政学的研究であった。ただ、内容からはとくに戦略に直接関係しない論文も多かった。これは教室に所属する者にとっては、半ば強制的に関与

すべき課題であった。

しかし、時代を反映して、進んでこの地域を研究対象としてとりあげる人も多かった。旧制中学や高校を外地で学んだ人も多かったこともそれを後押しした。教室の大学院生・助手や副手といった若手がこの流れを促進した。京都大学では河野通博の一年上の学年からこの影響が顕著になってきたが、応召によって大学院生として教室に残らなかったために、もろにはその影響を被ることはなかった。織田武雄、藤岡謙二郎という戦後の新制京都大学の地理学を担う人々はこの流れに無言の抵抗あるいは避けていたこともあり、公職追放にあわずに、戦後の新制大学で重要なポストにつくことになった。

河野は戦後、新制の岡山大学への着任したが、まだ中国へ調査にいける状況ではなく、文献研究をしながらそのチャンス wait していた。岡山県の代表として国交回復前の中国に、一九六三年という早い時期に主要な中国地理学者との交流を持ち得たことよって、日中地理学会の創設に中心的な役割を果たしている。その当時から的好友である呉傳均らとは、文化大革命中の一時的な途絶をはさんで、その後、改革開放の上げ潮にのって復活し、多くの中国人研究者の訪日や日本人研究者の中国地域調査に有形無形の支援をした。中国共産党と近い関係性を早くから築いていたことが、かなり早い両国の学術交流の基礎となった。河野はまた戦後の対馬調査や瀬戸内海を介して、在野の民俗学者である宮

本常一とも交流があった。私には、このふたりには、地域を見る温かいまなざしと、だれとでも親しくなれる雰囲気をも出し出す破笑顔でも相通じるものがあつたと思う。それが兩人とも没後も、多くの弟子・関わりのある人に慕われる由縁であろう。

〔付記〕本資料は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究B「地理学を核としたアジア地域研究のデータベースと研究者ネットワークの構築」(課題番号14390035、二〇〇二―二〇〇三年度、研究代表者 野間晴雄)によってなされたものである。

注

- (1) NOMA Haruo. Japanese Geographers. Contribution to East and Southeast Asian Studies since the 1980s. *Japanese Journal of Human Geography* [Jinbun Chiri] Vol.65, No.3, 1-16, 2013.
- (2) 河野はその後、この地域に関して「清代における湖北省の洪水」人文地理第一巻二号、一九四八年、「中国の水利設—歴史地理学紀要7、一九六五年、「荊江分洪」覚書、岡山史学、第一〇号、一九六〇年などの論考がある。最後の論考は岡山大学退官時に編んだ『河野通博論文集』岡山法文学部地理学談話会、一二五―二四二頁に所収。
- (3) 一九四一年から一九四四年までの京都帝国大学地理学教室卒業論文二七編のうち、二五編がアジアを中心に、世界各地の地政学的考察で、国内研究は民俗学に関心を持った中田栄一・林宏の二編にすぎない。柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割—総合地理研究会と陸軍参謀本部—」、歴史地理学四九(五)、一―三一頁、には一九三七年から一九四四年までの卒業論文題目や、陸軍とのかわりのあつた総合地理研究会(通称「吉田の会」)の詳細と、この会にかかわつた教室出身者の戦中期の経歴が記されている。その

ほか、京都大学文学部地理学教室編『地理学京都の百年』、ナカニシヤ出版、二〇〇八年。『京都大学文学部地理学教室百年史』(『地理学京都の百年』補遺) ナカニシヤ出版、二〇〇八年、参照。

(4) 前掲(3)、一一一―一八頁。また、小牧実繁をはじめ、宮川善造・増田忠雄などの個人史を追究した学位論文が、柴田陽一『帝国日本と地政学―アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践―』、清文堂出版、二〇一六年、である。

(5) 研究分担者は以下の八名であった。藤巻正己(立命館大学)、川端基夫(龍谷大学)、澁谷鎮明(中部大学)、香川貴志(京都教育大学)、高田将志(奈良女子大学)、熊谷圭知(お茶の水女子大学)、川口洋(帝塚山大学)、松村嘉久(阪南大学)。所属は当時のものである。

(6) 第六回アジアデータベース科研として、高槻市にある関西大学のゼミナーハウス高岳館で実施した。話題提供は河野通博氏のほか、石原潤(奈良大学、京都大学名誉教授)、秋山元秀(滋賀大学)であった。また集會参加者は野間のほか、科研研究分担者の川端基夫(龍谷大学)、高田将志(奈良女子大学)、澁谷鎮明(中部大学)、松村嘉久(阪南大学)であった。当日はこの他に、人文地理学会地理思想研究部会の新しい世話役である今里悟之(大阪教育大学、南埜猛(兵庫教育大学)、原田由起乃(現姓、筒井、追手門学院大学)、それに会議補助者として、水田憲志(関西大学博士後期課程)の二名が列席した。

(7) 京都帝国大学で地理学を学び、旧満州の中学で教鞭をとった。戦後は公職追放を受けたが、それが解けると、甲南学園高等学校・大学に奉職した。『続・地理学を語る』、古今書院、一九九九年、五〇―七二頁にインタビュー記録がある。

(8) 川上健三のこと。川上健三(一九〇九―一九九五)は京都帝国大学一九三三年の卒業。戦後外務省に勤め、『竹島の領有』、外務省条約局、一九五三年、『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院、一九六六年などの著書がある。近年の韓国との竹島問題でこの書が再び脚光をあびている。

(9) 富田芳郎(一八九五―一九八二)はもと東北大学理学部教授。東京高等師範学校出身の、山崎直方・辻村太郎、大関久五郎、内田寛一らに学び、一九二一年には東北帝国大学理学部地質学科に入学、その後、一九三三年に東北帝国大学法学部助手として田中館秀三のもとで助手、さらに奈良女子高等師範学校を経て台北帝国大学に勤め、台湾の地形発達史や集落地理を研究した。

(10) 探検地理学会(正式には京都探検地理学会)の創設は一九三八年で、会長には総長の羽田亨を据えるなど、全学的な文理融合の学際的学会であった。小牧実繁も、横山次郎、水野清一、徳田稔、今西錦司、木原均とともに幹事となっている。山野正彦『探検と地政学―大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向―』、人文研究(大阪市立大学文学部紀要、第五一卷第九分冊、一九九九年、一頁―三三頁、参照)。

(11) 森鹿三(一九〇六―一九八〇)。神戸生まれの東洋史学。京都大学人文科学研究所の教授を長年勤め、七〇年定年退官、その後佛教大学教授となる。織田武雄との共編での『歴史地理講座』全三巻、朝倉書店、一九五六―一九五七年、岩村三千夫・河野通博との共編『世界の文化地理第1巻 中国・朝鮮・モンゴル』講談社、一九六六年がある。中国歴史地理学の研究業績としては、『水経注』の訳や研究で知られた。

(12) 日比野丈夫(一九一四―二〇〇七)はその歴史地理学講座の後任で、定年後に追手門学院大学教授、大手前大学学長を歴任する。

(13) 正井泰夫・竹内啓一編『続・地理学を学ぶ』、古今書院、一九九九年。『続・地理学を学ぶ』の登場者は、米倉二郎・安田初雄・村上次男・浅井辰郎・佐藤甚次郎・吉崎恵次・安藤萬寿男・谷岡武雄・千葉徳爾・西村嘉助・山鹿誠次・高野史男・二神弘・田中耕三・町田貞・石田寛・有末武夫・清水馨八郎・河野通博の一九名。

(14) 京都大学人文科学研究所に勤務した東洋考古学者で、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査を指揮した。視野の広い研究者として著名で、若き日には、折口信夫に心酔し、西田直二郎の文化史学、濱田耕作の考古学方法を吸収するなど、民俗学への関心も強かった。

菊地暁「民俗学者・水野清——あるいは、「新しい歴史学」としての民俗学と考古学」(坂野徹編著『帝国を調べる——植民地フィールドワークの科学史——』勁草書房、二〇一六年、一三—一四頁)。なおこの編著に関しては、野間晴雄の書評がある(『人文地理』第六九卷二号、二〇一七年、二二〇—二二二頁)。

(15) 馬場敏太郎に関しては、岡田俊裕が物的資源を中心とした『支那經濟地理誌』(一九二二年、一九二八年)などを詳述している(岡田俊裕『日本地理学人物事典(近代編)』、原書房、二〇一一年、三六四—三七四頁)が、河野の馬場に対する評価は低い。

主要業績

〈著書〉

『漁場用益形態の研究』未来社、一九六二年

『河野通博論文集』岡山大学法文学部地理学談話会、一九七八年

『光と蔭の庶民史——瀬戸内に生きた人々——』古今書院、一九九一年

〈翻訳〉

衛傑文ほか編『現代中国地誌』(河野通博・青木千枝子訳)、古今書院、一九八二年

陳正祥『中国經濟地理』(河野通博監修、青木千枝子訳)、大明堂、一九三三年

『中国の農業の発展と国土整治』(日中地理学会編訳)、古今書院、一九八八年(編著)

河野通博編『東アジア』大明堂、一九七一年、一九九一年(新訂)

河野通博・加藤邦興編『阪神工業地帯——過去・現在・未来——』法律文化社、一九八八年

河野通博の業績は中国関係のほかにも、瀬戸内海・漁業、地域開発・環境問題、部落問題、地方史などがあり、短評まで含めると膨大な数にのぼる。二十八年にわたる岡山大学時代までの主要業績は右の『河野通博論文集』

に収録されている。関西大学在任中の比較的最近の業績は上記の「千里地理通信」、第二三号、一九九〇年、五一—九頁に一覧がある。なおこの号は「河野通博先生御退職特集号」として河野の「関大の十二年」(二頁)のほか、卒業生のエッセーが掲載されている。

参考文献

河野通博「関大での十二年」千里地理通信(関西大学地理学研究室)二二号、

一九九〇年

河野通博「私の歩んできた道」史泉(関西大学史学・地理学会)七二号、一

九九〇年

「河野通博先生に聞く」(正井泰夫・竹内啓一編『続・地理学を学ぶ』古今書院、一九九九年、所収)

Kono Michihiro's Course of China Study and International Academic Exchange during and after World War II: A Narrative Record

NOMA Haruo

KONO Michihiro (1919–2010) was a human geographer who studied the China region for about 60 years. He also contributed to academic exchange between Japan and China since soon after World War II. His motivation to study China may be traced back to the graduation thesis (1941) he submitted at Kyoto University Faculty of Letters on floods and their control in the middle section of the Yangtze River basin in terms of historical geography or geopolitics, under the guidance of Professor KOMAKI Saneshige. After completing it, he was drafted into the military and went to various places in China until the end of the war. Then he returned to Japan and obtained a position at Okayama University. He contributed to the establishment of the Geography Department there, and shifted to Kansai University for the last 12 years of his career. During his Okayama period, he was deeply involved in fishery and fishing village studies as well as environmental issues in the Setouchi area (Inland Sea). On the other hand, as early as 1963, he was one of the early visitors to the People's Republic of China as a Japan-China friendship delegation member of Okayama Prefecture, and the next year, he laid the foundation for academic cooperation between geographers of the two countries.

This material we compiled in 2003 is an oral record to tell to Japanese human geography researchers interested in Asia. He indicated two streams of research on China during World War II at Kyoto University: "Kyoto Exploration Geographical Society" centered on field studies with a natural sciences background by IMANISHI Kinji, UMESAO Tadao, KIRA Tatsuo and KAWAKITA Jiro; geopolitical studies centered on literature surveys conducted by the geography department under the supervision of KOMAKI. KONO himself belonged to the former group. However, he abandoned overseas field study, and wrote his graduation thesis using Japanese and Chinese documents. Completing it, he was immediately military drafted and served in the war in China until 1945. After the War, he became an initial establishing member of the Japan-China Joint Conference on Geography, and he also restarted China study with special reference to modern human geography overcoming the difficulties of the Cultural Revolution.

キーワード：河野通博 (KONO Michihiro)、中国研究 (China study)、京都大学 (Kyoto University)、岡山大学 (Okayama University)、関西大学 (Kansai University)、日中地理学会議 (Japan-China Joint Conference on Geography)